

夏休み ひとり旅

## 「 元親・四国の蓋になる 」

2013-7-20 ~ 23 遠藤俊一

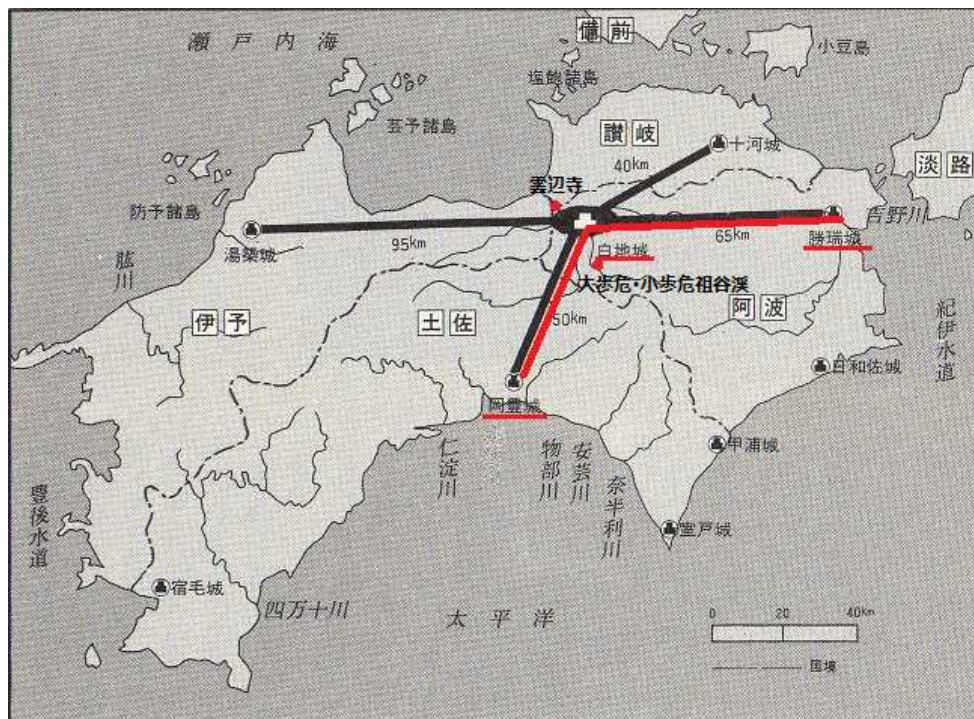
雲の辺りの寺と書いて雲辺寺(うんぺんじ)という。

山の高みにありここからは雲も下に見えるところから命名したらしい。

今の徳島県三好市池田町に位置し、阿讃山脈の最高峰にあって讃岐平野が一望できる。

土佐の国を統一した長宗我部元親(ちょうそかべもとちか)はこの地に進出し、この高いところから下界を見下ろした。阿波、讃岐、伊予を望める、いわばこの地は四国のへそになる。四国を統一するには絶好の地である。ここからは三方に進出できる地だ。この地に来てますます四国をわが手にとったに違いない。

しかしその旨を雲辺寺の住職に言うと元親はたしなめられた。あなたは土佐一国でいいではないか。四国全部をほしがると、まるで茶釜の蓋で水桶の蓋をするようなものだ。自分の器量を低く見られたようで、元親は水桶どころか四国の蓋になるとそぶいた。発奮した元親は阿波、讃岐、伊予と進出し四国統一を成し遂げ、見事、四国の蓋になった。



元親・四国侵攻路の本拠地・白地城

赤線は今回のひとり旅

今年の夏休みひとり旅のテーマ候補は二つあった。ひとつは「秀吉」、「信長」をやったのだから「家康」をもというのは当然の成り行きだ。そしたら「神君・家康の伊賀越え」とくる。もうひとつは、もともと暖めていた「元親の四国統一」だった。

ただ、「伊賀越え」のルートを調べだすと厄介だった。かなりの時間をかけてルートを調べ、何とか特定するところまでは来た。しかしそれを現代の地名と照合する時間を考え、さらに現代の交通機関でルートをたどるにはどうするのかを調査する時間を考えると、今は4月だ、夏までに間に合うか心配になってきた。ええい、一時中断、ゆるゆる調べながら計画してゆこう。楽しみは何年か先にとっておくのも良いではないか。

「元親の四国統一」ならばすでに「土佐統一」の事跡には行っている。後は阿波進出の道を通ればよい。しかもその時の白地城、勝瑞城は私のぜひとも行ってみたい城リストの上位にある。よし「元親」に決めた。まてよ、ただ「元親の四国統一」じゃあまともすぎて面白くないな、う～ん、そうだ雲辺寺の逸話がある、あれにしよう。というわけで「元親・四国の蓋になる」のテーマが決まった。

2013年7月20日(土)羽田発7:45、JAL1483で高知空港に着いた。9:20空港バスで高知駅に向かい10:00に到着した。駅前の案内所で聞いた路線バスは10:21に出発した。目的地は高知城ではなく岡豊城(おこうじょう)だ。もちろん長宗我部氏の居城跡である。今年の夏休みひとり旅は長宗我部元親の追っかけだ。

向こうに岡豊城址が見えてきた。手前の川が堀代わりをしている。既視感のある景色だ。実は私はここには以前一度来ている。あの時はちょっぴり小雨が降っていた。3年前の2010年、全国社会人卓球大会での到着日だ。選手は午後から練習場に行った。私だけは一人、かねてからの狙いの岡豊城に行った。女性のタクシー運転手は資料館から城址の城山返一緒に登ってくれた。そして証拠の写真を「岡豊城址」の碑前で撮ってもらった。

当時ぜひ行ってみたいと心に秘めていた城址はこの長宗我部の岡豊城と毛利元就の吉田郡山城(広島県)だった。ちょうど社会人大会があったので岡豊城が先になったが、それでもその2年後、昨年(2012年)の4月に卓球日本リーグのビッグトーナメント大会が山口県の徳山市で開かれたので、もちろん1日余分に日程を取って毛利の城跡、「吉田郡山城」「猿掛城」にもちゃっかり行っている。

バスは途中高知大学病院に寄り道し10:46「学校分岐」で私を降ろした。岡豊城址は現在「岡豊山歴史公園」といい「歴史民族資料館」が立っている。このバスは資料館まで登ってくれないほうのバスだった。ザックを背負っていよいよ坂道を歩き出す。戦国時代の城はみな山城だ、登るのは覚悟している。途中で香川親和(元親の弟)のお墓を見てさらに上る、15分位だろうか資料館に着いた。長宗我部の資料や民俗資料が展示されて

いたが以前に見た記憶はさっぱり蘇らなかった。目に付いたのは、元親が阿波に攻め入り勝瑞城を攻略する時の「中富川の戦い」の本陣内が人形、音声で再現されていた。三日後に行く予定のところなので興味深く腰を下ろしてゆっくりと見聞きした。

ザックを受付に預け、娘の雪乃からもらったお気に入りのオレンジのポシェットを肩に掛ける。中にはペットボトルの水と家から持ってきたお気に入りの三河屋のおかきせんべいを入れる。裏山の本丸跡に行くのだ。

資料館裏の階段を上がる。二の段から詰（つめ）の段に行く。普通のお城は二の丸、本丸と呼んでいるがここでは段というらしい。あまり大きな郭ではなくすぐに本丸とは呼ばない「詰の段」に着いた。あまり見所はないし、以前来たのでそこそこに後にする。

も少し先の「伝郭跡曲輪」に向かう。詰から四の段を見ながら歩く。何か歩道は整備されていて岡豊城跡というより岡豊山歴史公園という名前のおりの感じがする。もう少し古城の感じが良かったほうが良いかなどと思って坂を下り上りしているうちに曲輪に着いた。そこには展望のための櫓があった。屋根があるので日陰がある。風通しもいい。ようやく一息ついた。汗をぬぐい、水を飲む、そしてお待ち兼ねの“おかき”を食べる。三河屋のせんべいは本当に上手い。お気に入りだね。しばらく風に当たっていると汗も引いてきた。

詰（つめ）の段



「長宗我部氏岡豊城址」の碑

私には特技がある。

目をつぶるとその時代へタイムスリップが出来るのだ。「秀吉の中国攻め」のときは播州三木城で別所長治に、備中高松城で清水宗治に逢った。「信玄の信濃攻略」では北信濃の海津城で武田信玄に、妻女山では上杉謙信に出会った。「政宗の仙道制覇」では人取橋と摺上原で若き政宗に、仙台若林城では老いた政宗に出会い、「信長の朽木谷・一目散」では朽木谷で馬上の信長と顔を合わせ、瞬きしたら一瞬の間で消えてしまった。そんな特技があるのだ。ここは岡豊の城跡だ。四国を統一した長宗我部元親の本拠だ。よしやるぞ、目をつぶってみた、すると元親が現れた。

長宗我部元親は1539年に生まれた。初陣が永禄3年(1560)22歳の長浜の戦いであったというから戦国時代にあっては晩成型の武将だろう。小さい頃は色白で性格が柔和でどことなくぼんやりしていたため「姫和子(ひめわこ)」と呼ばれていたようだ。初陣で長浜の戦いを有利に導き、その年、父の国親(くにちか)の死により家督を継いだ頃には幼少時の軟弱なイメージはなく家臣の信頼を勝ち得た堂々たる青年武将として武名を高めてゆくことになる。

当時の土佐7郡は、中央4郡を長宗我部氏と本山氏、東の安芸郡を安芸氏、西の幡多郡、高岡郡を一条氏が支配していた。

元親はまず宿敵本山氏を討つ。浦戸城、朝倉城を落とし北部の本山城に追いやり、その本山城も攻略し本山氏を1564年に滅ぼす。土佐の中央は元親が領することになった。

次に東の安芸氏を永禄12年(1569)に滅ぼし、天正2年(1574)安芸郡東部の支城を攻略して阿波との国境付近の一部を除き安芸郡を領有する。

残る一条氏も内紛に乗じて天正2年家督を押さえ、翌天正3年(1575)渡川(四万十川)の戦いで破り、中村御所の名門守護一条氏も追われてしまった。

永禄3年(1560)に父国親の遺業を継承して15年、元親はここに土佐を統一した。「姫和子」はここに「土佐の出来人(できびと)」になった。

この土佐統一の事跡を追いかけたのが3年前の社会人卓球大会のときのことだ。雨の岡豊城から始まり、翌日、路面電車を降りて朝倉神社から本山氏の本拠跡の朝倉城へ登っていった。また、浦戸城は太平洋を一望する桂浜の丘陵上にあった。今は坂本竜馬記念館の正面に「浦戸城址」の碑があるが竜馬が主役で浦戸城は付け足しのようなものだ。元親は岡豊城から大高坂城(現高知城)をへて本拠をこの浦戸城に移したのだ。もっと大事にしろと憤った。日を置いて最終日に中村まで出かけた。高知から特急でわざわざ往復3時間、守護一条氏の本拠だ。中村御所、為松城(中村城)、渡川(わたりがわ)の古戦場跡を電動自転車で回った。大学卓球部の後輩でダブルspartnerであった国吉はこの中村が故郷だ。彼にそのことをメールしたことを思い出す。

浦戸城



渡川の古戦場跡

土佐を統一した元親は四国制覇を目指し北方にそびえる脊梁（せきりょう）山脈を越えて怒涛の進撃を続ける。今回の私の旅はいわば3年前の後編になる。だから、その出発点もまずは元親の本拠とした岡豊城から始めたかった。一度行ったところだが、そこはほれ、私のこだわりの旅である。

目を開けると元親はいなくなった。元の道を戻り、詰めの段を通り、3年前に女性のタクシー運転手に雨の中で写真を撮ってもらった「長宗我部氏碑」をパチリ、資料館に戻る。

13:10、バスは資料館発だった。高知駅に13:40着。駅で鯖寿司とのり巻きのセットを買う。ビールのつまみ用にほうれん草の白和えも買う。

JR「南国18号」は14:13に出発した。駅弁にビール、車窓は市街、たんぼ、そして山に入ってゆく。アルコールでほっぺたが熱くなってきた。電車旅のいいところだ。ここは元親が土佐から四国統一のため阿波、讃岐、伊予へと辿った道だ。その拠点となるべき四国のへそ、白地城攻略に向かった道だ。山はだんだん険しくなってくる。

15:22阿波池田駅に到着。池田町は徳島県の西端部に位置し、中央構造線に沿ってできた吉野川地溝帯の最も奥まったところにある。細長い吉野川平野の終点にあたり、河川交通の終点でもあり、山間部と平野の結節点になっている。

この町並みの西部に元親が四国制覇の拠点とした白地城址がある。池田からは峠を越えて讃岐に出ることもできるし、吉野川地溝帯の延長を馬路川に沿って西へ行くと伊予に出る。南へは土佐街道を通り土佐へ行ける。四国の交通の中心としての役割を果たしていた。

いまでも高松から高知への国道32号線と徳島から愛媛県川之江市へ通じる国道192号線が交差している。池田町自らが“四国のへそ”を標榜している所以である。

駅前の商店街を歩き、角を左に曲がると今日の宿「マルフク旅館」があった。いかにも昔からある田舎の旅館という感じだ。8畳一間の部屋に案内される。ザックを降ろすと日の暮れないうちに町を見てこようと外へ飛び出す。お目当ては大西城（池田城）だ。元親の時代、この地の中心だった白地城の支城という位置づけだろうか。

宿のおばちゃんにもらった観光案内マップを手に歩き出す。すぐに台地のような石垣にぶつかる。階段を上がる。池田高校の案内が目についた。甲子園で有名だった蔦監督の池田高校だ。何かのグラビア写真で“ノックの音がこだまする山間のグラウンド”という記事を思い出した。おお、そこへ行こう。グラウンドの周りを見回すと山、山が迫ってくる。蔦さんの「攻めだるま」でさわやかイレブンや夏春連覇の連中が鍛えられたグラウンドかと自分の若かりし頃にも思いやる。「やまびこ打線」のネーミングもうなずける。校舎のほうに回ると甲子園出場記念碑が沢山あり、畠山、水野という名を見つけた。

この辺は文教地区だ。池田高、池田中、池田幼稚園、池田小と続いている。その幼稚園

の東側に池田城の往時を偲ぶ石垣があった。建物の土台が高くなっていてその下に石垣がまさに日陰の身をすくめているようにあった。案内板に池田城石垣跡とあるので気をつけていれば見つけられるがそうでないときっと見落とすな。写真をパチリ、コレクションがまた一つ増えた。その先の諏訪神社に寄りぶらりぶらりと歩いて宿に戻る。

池田城碑



池田城の石垣跡

宿に帰るとおばちゃんに来てお風呂をどうぞといって洗面器とタオルと百円玉を二つくれた。前にある銭湯に行ってくれという。どうやら同じ経営のようだ。これもまた面白いなとサンダルをつっかけた。湯から帰ると夕食だ。刺身と煮しめとサラダがちょこっとテーブルにのっていた。それでも風呂上りのビールはうまい。一人っきりだって寂しくないやい。

7/21(日)一人旅2日目、今日は観光の日である。元親の追っかけは一休み、楽しみにしていた“ボンネットバスツアー”で大歩危(おおぼけ)、小歩危(こぼけ)、祖谷(いや)の吊橋をめぐる。出発時間は11:30だから時間がある。予定では池田城跡を歩くことだったが昨日に終わっている。池田の“うだつ”を見物しよう。

“うだつ”とは1階と2階の屋根の間に設けられた小さな壁で隣の家との境にあり防火などの役目をしている。うだつを造るには相当な費用が掛かるので「うだつを上げる」という言葉の由来になっている。財力のシンボルでもある。反対にダメ男には「うだつが上がらない」といわれる。うだつの町としてはお隣の脇町の町並みが有名だが、池田もなかなかなものだ。

うだつ



葛監督の実家・うだつ

「池田うだつのまち歩きマップ」を手にして見て回った。10家くらいであろうか所々にかたまっている。瓦紋はいろいろあるし、長いのは14連瓦だった。驚いたのはあの蔦監督の実家があった。偶然、マップを見てこの家は蔦監督の家だったんだとびっくりした。切妻作りの"うだつ"だった。十分、うだつを堪能してバスセンターに向かった。

ボンネットバスは25～6人乗り位だろうか、鼻の出張った懐かしいボンネットのバスだ。昭和40年代に使われていたのを修理して観光用に再出発している。専任の運転手がメンテナンスと修理も担当しているが古いので部品補充に苦労しているとガイドブックに書いてあった。

ボンネットバスで  
ご機嫌



ここでとんでもないことを聞いた。時間があつたのでバス運行図を眺めていた。バス停「保養センター」が目にとまった。今回の旅の目玉の一つは白地城址である。そこは保養センターの開発で跡形もない、わずかに碑が立っていることで昔を偲ぶとあつた。

「いいよ、何にもなくたって目をつぶれば白地城が出てくるよ、俺にはそれで十分だ」そう考えてここに来ている。今夜の宿の「あわの抄」は住所が白地となっている。そこから歩いて保養センター（白地城址）を探すのが計画だった。ところが、保養センターは経営が変わり今は「あわの抄」になっている。なんと、俺は白地城址で寝泊りするの、嬉しくなると同時に元親が俺を引き寄せたと思った。

乗客は16人、私と中年の女性以外は家族連れだ。小さな団扇を配られた。窓は開けっ放しの天然クーラーときた。出発するとクッションがあまり良くないのかゴトゴトいいながら、それでも結構なスピードで吉野川沿いの国道を進む。

しばらくするとかなり年配の女性ガイドが橋の向こうの小高い丘にある建物が「あわの抄」だと教えてくれた。あれが白地城か、前には吉野川が流れている、堀代わりだな。結構高いところにある、両側は側壁になるな。向こうから見れば見晴らしのよさそうところだ。敵が押し寄せてきても見通しが利くだろう。うん、難攻不落の白地城だな。

望めば帰りには途中で降ろしてくれるそうだ。が上りはきついですよと言う。丁寧にお

断りしてバスセンターまでとお願いした。

途中で車窓から小歩危の景勝地を眺めた。急流なのでラフティングに最適だそうでゴムボートがいくつも見える。孫たちがもう少し大きくなればせがまれるだろうなと思いニヤリとした。最初下車地は大歩危だ。ここで遊覧船見物をして、戻って昼食だ。

私が大歩危、小歩危を知ったのはもう55年も前の中学2年の時だった。社会科の授業で日本の観光地図を作ることになった。先生はグループリーダーに私を指名しなかった。なぜだと私は不満だったがそれでも一所懸命に地図を作った。四国で印象に残ったのが「大歩危」「小歩危」だった。読み方が珍しかったからであろうか、それだけが記憶に残った。いつか行ってやろうと思っていたが55年目でそれが果たせることになった。

遊覧船は別のグループと一緒に30人弱で出発、岩石の張り出した崖を見ながらゆりりと下ってゆく。この岩石は日本では秩父の長瀬とここだけにしかないという。そして方向はお互いに反対を向いている。日本列島を貫く何かがあるのだろうとの船頭のもっともらしい説明を聞きながら30分で帰ってきた。

小  
歩  
危



大  
歩  
危



昼食は五目寿司と祖谷（いや）そばだった。祖谷そばに興味を持っていたが普通のかけそばにかまぼこ、きざみ油揚げ、ねぎが入っただけのさっぱりしたものだった。

次の停車地は5分ほどで「妖怪屋敷」だった。この辺は妖怪話の多いところだそうだ。岩手の遠野は民話で祖谷は妖怪かと面白くなった。

そして出発。ここからは吉野川と別れ、支流の祖谷川沿いにどんどん山を登ってゆく。「平家屋敷」、もうこういう山里離れたところでは必ず平家の落武者が出てくる。安徳天皇のお側についていた医師の家という。ここでは安徳天皇も生きていたことになっているらしい。異論も挟まず、ふんふんと聞いて、はい出発。山深くなる、次はいよいよお待ち兼ねの「祖谷の吊橋」だ。

「祖谷のかずら橋」は日本三大奇橋として知られ、深い谷に流れる祖谷川に架けられている。山に自生するシラクチカズラのつるを編んで作られ、つるの耐久性から3年に一度架け替えられる。祖谷観光のメインスポットのひとつで、思わず足がすくむほどスリル満



点といわれているところだ

バスを降りてかずら橋に向かう。ずらっと列が並んでいる。かずら橋は一方通行で有料となっている。でも観光バス料金に含まれているのでガイドさんの後に続く。いよいよ渡る番だ。

ところが渋滞である。意外と間隔の広い橋床の木の間から下が見える。足を滑らすと木の間に挟まってしまう。だからみんな吊橋の手すりになる「かずら」をつかんで恐る恐る足を運んでいる。橋は長さ 45m、幅 2 m、高さ 14mだ。左端のカズラは若いカップルの女性が、右端は家族連れの子供が先頭だ。双方とも亀の如き歩きをしているので、ずらっと渋滞してしまっていた。ふと見ると真ん中は開いている。「失礼します」と心の中でつぶやいて第一歩を進めた。

私には子供たちとのフィールドアスレチックの経験がある。下手にゆっくりゆっくりではかえってバランスを崩す。ホッ、ホッ、ホッ、ホッと調子をとってずんずん進んだ。すると、後ろから「すげー」「すごいな～」という声が聞こえた。嬉しくなって、又調子をつけて、ホッ、ホッ、ホッ、ホッと進む。あっという間に橋の真ん中に来た。この辺には人があんまりいない。先ほどの女性や子供が人の流れをせき止めていたからだろう。思わず止まってみた。このままでは景色も見ずに吊橋を渡りきってしまう。もったいないではないか。止まって景色を見ることにした。止まってみるとちょっぴり怖い。脇のカズラを握り締める。今度は安心して周りを見る。緑の中に川や岩肌が見える。それなりに絶景である。そして又、ホッ、ホッ、ホッ、ホッと調子をつけて一気に渡りきった。



祖谷のかずら橋



バスはさらに高度を上げて祖谷溪を登ってゆく。100M下に川が見える。こんな険しいところなんだと思わず首をすくめ、元親も土佐からここを超えて白地城に迫った時は山道に苦労しただろうなと思いやる。まもなく「小便小僧」に着いた。道路のすぐ脇にある。でもここは200Mの断崖絶壁に突き出している。この手すりを越えて小便小僧に触ろうとは思わないよな。目が回って命がいくつあっても足りないよ。写真で我慢しよう。

小便小僧  
断崖絶壁だ



バスは山道を下り、祖谷口で元来た道に戻り、白地城跡下を過ぎ池田に戻った。バスターミナルの売店でスポーツタオルを買った。小便小僧やかずら橋の絵が入ったものだ。こういうのを私が買うのは珍しい。きっとボンネットバスツアーが気に入ったのだろう。

路線バスで保養センターに向かう。吉野川沿いを走る道から脇に入り急な坂を上りついたらところが今夜の宿の「あわの抄」であり白地城址だ。バス停は門のすぐ前だった。前庭があり駐車場とも隣り合っていて広い。すぐに建物に入らずザックを担いだまま探した。たしか以前見たガイドブックには保養センター敷地内に古びた木の碑が立っていたはずだ。白地城址と書いてあるはずだ。だがそんなのはなかった。見つかったのは植え込みの中にあつた白い看板で「白地大西城址」とあつた。ここは「保養センター」ではなく「あわの抄」に経営が変わった象徴かなと経済界での戦闘を思った。

ホテルのフロントで白地城址の碑は他にはないかと何気なく尋ねた。

「白地城址っていう碑は植え込みの所以外にある？」

「門を出て左に5～60メートル先を左に曲がると石碑がありますよ」

「えっ、そんなのあるの、部屋で荷物を置いたら行ってみるよ」

老人ホームのような建物の敷地のようなところを通るとちょっとした空き地がある。周りを木が囲んで薄暗くなっている。立派なものだった。大きな石碑に白字で「白地城址」と書いてある。何か嬉しくなった。目をつぶってみると元親がそこにいるような気がした。

あわの抄・白地城址看板



白地城址碑

まだ明るかったので辺りをぐるりと歩いてみた。川からすぐ立ち上がっている山の上に築いたのが白地城だ。その頂上で本丸跡辺りの削平地を今はさらに開発して住宅地になっている。ぐるっと歩くと削平地の端は険しくなっている。これでは武将たちも攻めづらかっただろうなとわかる。難攻不落の城だったのだろう。

それでもひとつだけ疑問が残った。ここが最高地ではない。門の向こうにもまだ高い山が見えている。あそこを取られたらこの本丸は守りづらいではないか。考えた拳句の結論はあの山もこの城郭の一部として縄張りを考えたのではないか、詰め丸ではないかということだった。そうしたら防衛線はかなり広がるな、そんなに兵力を於いていたのだろうか。いろいろ考えていたら面倒になってきた。ええい面倒だ、直接聞いてみよう。目をつぶったら元親が出てきた。でも何も答えてくれなかった。

後になって調べてみると、当時はあの高い山と城郭の間には深い大岩谷があり、大規模な堀になっていた。向こうからいきなりには攻められなかったのだ。今は住宅用に造成してしまったので地続きのように見えたのだ。やはり、難攻不落の白地城だったのだな。

土佐を統一した元親は初め阿波へは東の安芸から海岸沿いに北上、侵入した。伊予へは西の中村から北上侵入を図った。細い海岸線からでは侵攻も簡単ではない。平行作戦として中央の白地城は何としてもほしかった。

天正4年(1576)元親は白地へ侵入する。阿波を支配する三好氏の一族で白地城主の大西覚養(かくよう)を一度は計略を持って味方につけた。翌天正5年の春、元親は雲辺寺山に登った。この時に「四国の蓋エピソード」が生まれたのだ。その後、大西覚養が元親に背いて十河存保(そごうまさやす)に寝返ったため天正6年(1578)2月、再び白地を攻め落とした。この白地城が阿波、讃岐、伊予攻略の拠点となった。

その白地城址で一夜の眠りについた。

2013年7月22日(月)、今年の夏休みひとり旅の3日目になった。昨夜の宿「あわの抄」は白地(はくち)城跡に建っていた。今回の旅の目玉は白地城と雲辺寺だ。その白地城の跡に思いもかけず泊まったことになる。元親さんの導きだったのだろうね。そして今朝9:30、タクシーで雲辺寺に向かった。雲辺寺には二つのルートがある。香川県(讃岐)の観音寺からロープウェイで行くルートと徳島県(阿波)からは車で行くルートだ。最近ではロープウェールートから行く人が多いそうだが私はそうじゃない。目的があるんだから。元親を追っかけているんだから。

車は山道をどんどん高度を上げて登ってゆく2~30分もしたところで運ちゃんが言う、「お客さん、もうすぐ雲辺寺ですがここは道路修理費用として500円掛かります」「いいんじゃない、いよいよ雲の辺りの寺と書いて雲辺寺だね」

「ええ、誰でも間違わずにそう読めますがね、ほら着きました。500円払っておいてくださいね」

突き当たった駐車場はさほど広くなく4,5台しか停まっていなかった。舗装された道を登ってゆく。しばらく行くと左に上る階段があった。道なりに行くのか階段に行くのかちょっと迷った。すると後ろから足音が追いついてきてやはりここで立ち止まった。お遍路さんがつけるような白い衣を首にかけている。若い男だ。ちょっと考え込んでいる。

「地元の方ですか、お遍路参りですか」

「ええ、夏休みなのでいくつか回ろうと思って・・・」道はどちらだろうかという顔をして私を見た。

「道なりでしょう、看板がありますね」私も迷ったなどとはおくびにも出さずに歩き出した。

本殿に着いた。まず、納経所と書いてあるところで道路補修協力金を払う。代わりに安全祈願の箸をくれた。彼女に聞いてみた。

「ここは長宗我部元親が住職にたしなめられたところですよ、元親のことを表すものはどこかにあるのですか」

「いいえ、何もありません」

「じゃあ、元親が阿波、讃岐、伊予をみな見たというところはどこですか」

「私たちには裏山談義と伝わっています。どこかはわかりませんが裏山というのであちらのほうでしょう」と指を指してくれた。その間にもお遍路さんらしい人の納経書らしきものに達筆で筆を入れている。

ここで写真撮影をと思ったが、周りにはどこにも「雲辺寺」と書いた碑も看板もない。ようやくタバコ吸殻入れの前に小さな石柱があり雲辺寺と書いてあった。先ほどの彼は本殿で口ウソクを灯し、なにやら祈っている。仕方ないので他の人にシャッターを押してもらおう。石柱が小さいからしゃがむしかない。シャッターを押してくれた彼が言う。

「向こうの仁王門のところに雲辺寺と書いた大きな碑がありますよ」

(早く言ってくれば)ともいえず、ありがとうございましたといってそちらに向かう。なるほど立派な碑があった。通りかかった人にシャッターを頼み一安心。



雲  
辺  
寺



近辺を散策、五百羅漢があった。いろいろな顔だ。しかし仏像と違って普通の顔だ。後でタクシーの運ちゃんに聞いた話だが、羅漢さんの顔を良く見るとどこかに父や祖父に似た顔が必ずあるという。でも、この時はそんな話を知らなかったので適当に見過ごしてしまった。運ちゃん、もっと先に言ってよ。

道をもっと上にとる。毘沙門天展望館と矢印が示してあった。其の先にはロープウェイの駅があった。多くの方は向こうから来るのか。館の中に入る。螺旋状ののぼりだ。壁に四国八十八箇所の版画絵が貼ってある。見ながら上ってもつまづかないように階段ではないのか。66番目をついつい探してしまう。雲辺寺だ。てっぺんに着いた。外は回廊上になっていて、伊予、讃岐、土佐、阿波と方向を示している。元親になったつもりであちらが阿波か、こちらが伊予だ、向こうが讃岐で、すると土佐はなどと案内板を見て悦に入った。さて景色を見てみた。ありゃ、霧が出てきた、こりゃ雲かな、景色が見えないではないか。どうなっているんだ。でもすぐに機嫌を直した。雲の辺りの寺だからこれでいい、これでいい。すっかり、元親の気分になっていた。

駐車場に戻る。運ちゃん曰く、「ちょうど1時間10分でしたよ。待ち時間は料金につけませんからね」と得意顔だった。このまま池田駅にかえっても時間が余る。

「運転手さん、もう一つくらい見物するところはないかな」

「おとつい池田を見てるんでしょ、狭いところですからみんな見てるでしょ」

「でも、何かない。蓮華寺ってあるでしょ」

「う～ん、あそこもね～」

「箸蔵寺でミステリーツアーがあるとか、宿でパンフレットもらったよ」

「えっ、そんなのありましたか」

「蓮華寺と箸蔵寺じゃどっちが大きいの」

「そりゃあ箸蔵寺ですよ」

「ロープウェイで行くんでしょ、そこ行こうよ」

ロープウェイは15分間隔で出ている。降りたところはもう箸蔵寺の境内だ。なかなかのものだった。箸蔵山600Mの山頂にあり1200年前に弘法大師がこの地で修行したらしい。国指定重要文化財として本殿、薬師堂、護摩堂などがある。さらに途中、2度ほど息をついて上った急階段の上に本堂がありなかなかのものだ。ロープウェイと一緒に上ってきた他の2組の家族連れは階段を敬遠したのか姿が見えなかった。その奥に「八十八ヶ所(お砂踏場)」があった。88の石像にはお寺名が書いてあり、私はぐるっと回った。ここでも66番目は雲辺寺だった。これで四国88ヶ所を回ったことになる。

駅に戻り、商店街のうどん屋に入り、てんぷら定食と祖谷そばのセットを頼む。そばはぶつぶつに切れた短いものでくずそばかと思うほどだった。

「まあ、つなぎを入れない十割そばは長くできないと聞いたから、これはそうなんだろう」  
プラス思考を試してみたがどうにも合点がなかった。

13:33 阿波池田発“ 剣山6号 ”で徳島に向かう。池田を過ぎると平地になってきた。  
白地城を落とした元親はこの道を通り阿波攻略に向かったのだろうと考えているうちに  
14:45 徳島に到着した。

天正6年(1578)元親は白地城を攻略し、そこを拠点として四国統一への戦いを進める。  
南阿波、南伊予へはそれぞれ東海岸沿い、西海岸沿いから北上侵攻しつつあった。  
並行して白地城からは中央からの侵攻で阿波、讃岐、伊予のいわば三方同時作戦であった。

阿波は元来守護の細川氏の領国であったが家臣の三好氏が主家に代わって一国を支配し、  
讃岐にも勢力を拡張していた。

阿波へは白地城から吉野川沿いを東進することになる。天正7年元親は美馬郡の重清城、  
岩倉城を落とし阿波西部ににらみを利かせた。元親の弟の香宗我部親泰(こうそかべちか  
やす)に東海岸から南阿波を侵攻させ、残るは東阿波となった。

ここに織田信長が登場する。はじめ元親は明智光秀を通じて信長とは誼(よしみ)を通  
じていた。長男に信長の名をもらって信親(のぶちか)と名づけているくらいだった。「四  
国のことは元親の切り取り次第」という信長からのお墨付きももらっていた。しかし元親  
のあまりの勢力拡張を恐れた信長の政策が変わる。この信長の支援を受けた三好康長は天  
正9年讃岐から阿波の岩倉城に入り、一族の十河存保(そごうまさやす)と連携して元親  
に敵対した。天正10年5月、信長は3男信孝と丹羽長秀を大将として元親討伐軍を起こ  
し摂津(大阪)に大軍を集結することにした。三好の旧臣は元親から離反、元親の運命は  
風前の灯となった。

天正10年6月2日、正にこの時に「本能寺の変」が起こった。信長が死に、織田軍撤  
退、勢いを取り戻した元親の進軍が始まる。十河存保の守る阿波の本拠「勝瑞城」に迫る。  
8月27日、勝瑞の西にある中富川で長宗我部・三好軍の大決戦が行われた。これが「中  
富川の戦い」である。これに勝利した元親は9月に勝瑞城を落とし、直ちに岩倉城も落と  
してここに阿波統一がなった。

駅前のホテルサンルート徳島で旅装を解く。30分ほど休息して身軽になって徳島城に  
向かう。歩いて10分位であろうか跨線橋を渡るとお城だった。

徳島城は戦国時代には猪山(いのやま)城と呼ばれ細川氏の居城だった。元親はこの城  
を攻略して城代を置いている。その後豊臣秀吉の四国攻めにあい城代は城を捨てて本国の  
土佐に帰っている。

しかし、当時のこの地方の中心の城は明日行く予定の勝瑞城である。今日は徳島城をざっと見るだけでいい。現在は徳島中央公園となっている。本丸や二の丸、三の丸が置かれた城山と麓の御殿と西の丸から構成された平山城である。でもこれは豊臣政権での蜂須賀氏が整備したものだ。戦国時代の猪山城はもっと規模も小さかっただろう。天守閣は東二の丸にあった。普通は本丸にあるのに。よほど外様大名としての蜂須賀氏は徳川幕府に気を使ったのだろうと一人合点した。すぐ上の本丸は広々としていた。この城山を上って下っても30分くらいだったが、夏だもの汗がひっきりなしに出てくる。園内の茶店でカキ氷とラムネを頼む。少なくなったカキ氷にラムネを入れて飲む。遠藤スペシャルだ。これが実に上手い。汗も引いてくる。御殿跡の徳島城博物館が休館日でその不機嫌さも直ってしまった。

徳島城



宿に帰りシャワーを浴び一休みした。夕食の場所を探しに行く。あまり遠くに行く気がしない。そうだ、お城の帰りに見たちょっとこぎれいな一口会席料理屋があったな、あそこにしよう。暖簾をくぐり店に入る。奥にも部屋があるようだが一枚板のカウンターに案内される。まずは生ビール、ぐいと飲むとのどにきゅっと沁みる。この一口が、とりわけ夏には最高だ。メニューの最初に書いてあった“おまかせ会席”を頼む。しばらく一人で飲み食いし、時々お運びのおばさんと取り留めのない会話を楽しんだ。すると、少し離れたカウンターのお客さんが話しに入ってきた。もう引退間近の遠洋漁業の船乗りだ。今日陸に上がり明日は電車で帰るといふ。料理は社用費で出るが酒は自前だと領収書を別々に切ってもらっていた。お互い一人酒同士で彼は人恋しい気がしたのだろう。やがて彼が先に帰り、私も切りがいいので店を後にした。

7/23(火)最終日だ。ホテルに荷物を預けオレンジのポシェットをしょって出発する。今日は勝瑞城に行く。元親が阿波攻めをした時の阿波は三好氏が支配していた。勝瑞城が当時の中心地だ。敵将十河存保(そごうまさやす)の本拠地だ。JR徳島発10:01、15分で勝瑞駅に着く。駅前の観光案内の看板を見やる。ふん、左のほうに行けばいいな。500Mほど歩くと広い道に突き当たった。さて右に行くのか左に行くか。はたと迷う。辺りをきょろきょろ見回すがそれらしき案内板はない。角の食堂らしき店に入り尋ねた。

なんと、すぐ左7～80Mほどのところだという。よく見ると案内板が見える。ありがとうございましたと横断歩道を渡り左折、すぐに勝瑞城跡という小さなぶら下がり看板があった。くすんでいる、まあ年代ものだ。

入ってゆくと「史跡勝瑞城址」という石碑があった。その先、今は見性寺である。ここが本丸跡らしい。あまり大きくないお寺で敷地もそんなに広くはない。セラミック板を合わせた案内板で勝瑞城の説明をしていた。川も小さいものだ。ちょっと意外な感じだ。ここが阿波三好の本拠、勝瑞城か、本当かなという感じだ。しかも戦国時代では当たり前だった山城や平山城ではなく全くの平城だ。これだけの平地は初めてかなとも思った。すると当時はこの辺は沼地かな。そうでないと守りにならないよな。昔とはずいぶん変わっているのだろうけどこの平らさは変えようがないだろうな。

勝瑞駅



勝瑞城址 (見性寺)

前もって調べていた資料には近くに勝瑞城館跡というところがあるそうだ。その辺りを歩いてどこだろうと首を伸ばしてみたが見当が付かない。時間が過ぎてゆく。そばに停まっていたバンの運転席にいたお兄さんに聞いてみる。販売員のようなだったが自分も詳しくないが向こうのガソリンスタンドの先に広い空き地があるからあれじゃないかと教えてくれた。行ってみると工事中らしく鋼鉄の囲いがある。そこに勝瑞城館跡とあり、整備中の完成図が書いてあった。よし、ここだここだと中に入る。

勝瑞城館跡



中に入るとまだ整地中のような感じだった、土がむき出しになり大きな溝も掘っているところのようだ。かなり広い敷地で向こうのほうに何かの建物がある。行ってみると舞台のよう



な建物でまだ未完成なのかもしれない。枯山水を作っているようで小石が並べられていた。どうやらここは茶人としても有名な三好義賢の居館跡だったらしい。

城跡と館跡を合わせた勝瑞城館跡は国史跡に指定されている。堀に囲まれた複数の曲輪が集合する複郭式の城館跡で戦国大名の居館としては全国最大規模であると説明書には載っていたが、そうなのかなと素直には思えなかった。

それでも念願の勝瑞城にやってきたという満足感を持って駅に戻った。

最後は中富川の古戦場跡だ。駅の案内板には絵図で載っていた。駅から2分ほどのタクシー営業所に行く。中富川の戦場跡に行ってくれという運転手はそんなところあるんですかと聞いてきた。あるんでしょ、案内図に載ってるよと答えると運ちゃんは他の運転手に聞いている。返事もあいまいですったもんだしている。駅前の案内図も見に行った。それで見当をつけたらしく出発した。

先ほどの勝瑞城跡の前を通り、しばらく走り、橋を渡ったところでとまった。ここですというので写真を撮りパチリと撮った。碑も立っていない。なにか納得できないので若一王子神社と王子神社に行ってくれと言った。私の持つ「徳島県の歴史散歩」には中世その辺りから北東に流れていた吉野川の旧河道は中富川と呼ばれており一帯が中富川の合戦の古戦場と書いてある。今度は運転手が納得しないような顔をして出発した。距離はあまりないようだったが苦勞して王子神社を探した。土手を上がって川原をパチリとやった。ここにも碑はなかったがようやく私の心も落ち着いた。

もともと戦場というのはややこしい。場所が広範囲にわたるからだ。それなのに碑が立っているところはただの一点だ。あればいいほうで今度のようにそれもないところが多い。さっき運ちゃんが連れて行ってくれたところも昔中富川と呼ばれていたところだそうだから古戦場跡ということも十分ありうるのだ。ともかくこの辺りで戦いは行われたのだろうなと自分で自分を納得させた。



中富川の戦い古戦場



勝瑞駅に戻りJR徳島駅まで帰った。昨夜夕食の帰りに気になっていたホテルのならばにあった店でカレーライスを食べた。さらに隣のラーメン屋に寄る。餃子だけを頼んだ。元親のおっかけ旅も、もうまもなく終わる。

中富川の戦いで勝利した元親は勝瑞城、岩倉城を落とし、天正10年(1582)阿波統一、ついで天正12年(1584)讃岐統一、天正13年春(1585)伊予統一で元親は四国を制覇する。土佐統一から10年、白地城攻略から7年後のことだった。ここに元親は雲辺寺で誓った四国の蓋になることが出来たのだ。

ホテルで預けておいたザックを受け取り、徳島駅からリムジンバスで徳島阿波おどり空港に行く。17:00、JAL1440便にのる。飛び立った空の上から下を見る。目をつぶる。寂しそうな元親の顔が見えた。

元親悲願の四国統一も結果的には、わずか数ヶ月の命運でしかなかったのだ。その年の6月16日から始まる織田信長の後継者、羽柴秀吉による四国征伐によって元親は窮地に陥る。白地城で四国防衛の指揮を取った元親の抵抗も、秀吉の圧倒的な兵力、物量の戦力にはどうにも対抗のしようが無かった。白地城で秀吉に降伏した元親は土佐一国だけを安堵され元に戻ってしまうことになる。

「元親さんよ、そんなに悲しそうにすることはないよ。あんたの偉業に変わりはないよ。四国統一なんて誰も出来なかったんだ、すごいことをしたんだよ。俺はそう思っているよ」元親がにこっと笑ったような気がした。

長宗我部元親の歴史的評価はどうだろう。私は高いと思っている。しかし地元ではそう扱われていないのではないか。徳島、香川、愛媛では仕方がない。征服された方だから。でも、高知では高く評価すべきだろう。これだけの偉人なのにそう扱っていないように思う。高知じゃどこへ行っても竜馬、竜馬、坂本竜馬だったじゃないか。もっと元親の評価を高めなさいよ。そう思いながら18:15羽田空港に降り立った。